

学校教育目標



確かな学力と豊かな感性に培い、仲間とともにやりぬく子どもの育成

めざす子ども像

・学び合う子(問題解決力) ・支え合う子(共生) ・やりぬく子(自律)

研究主題

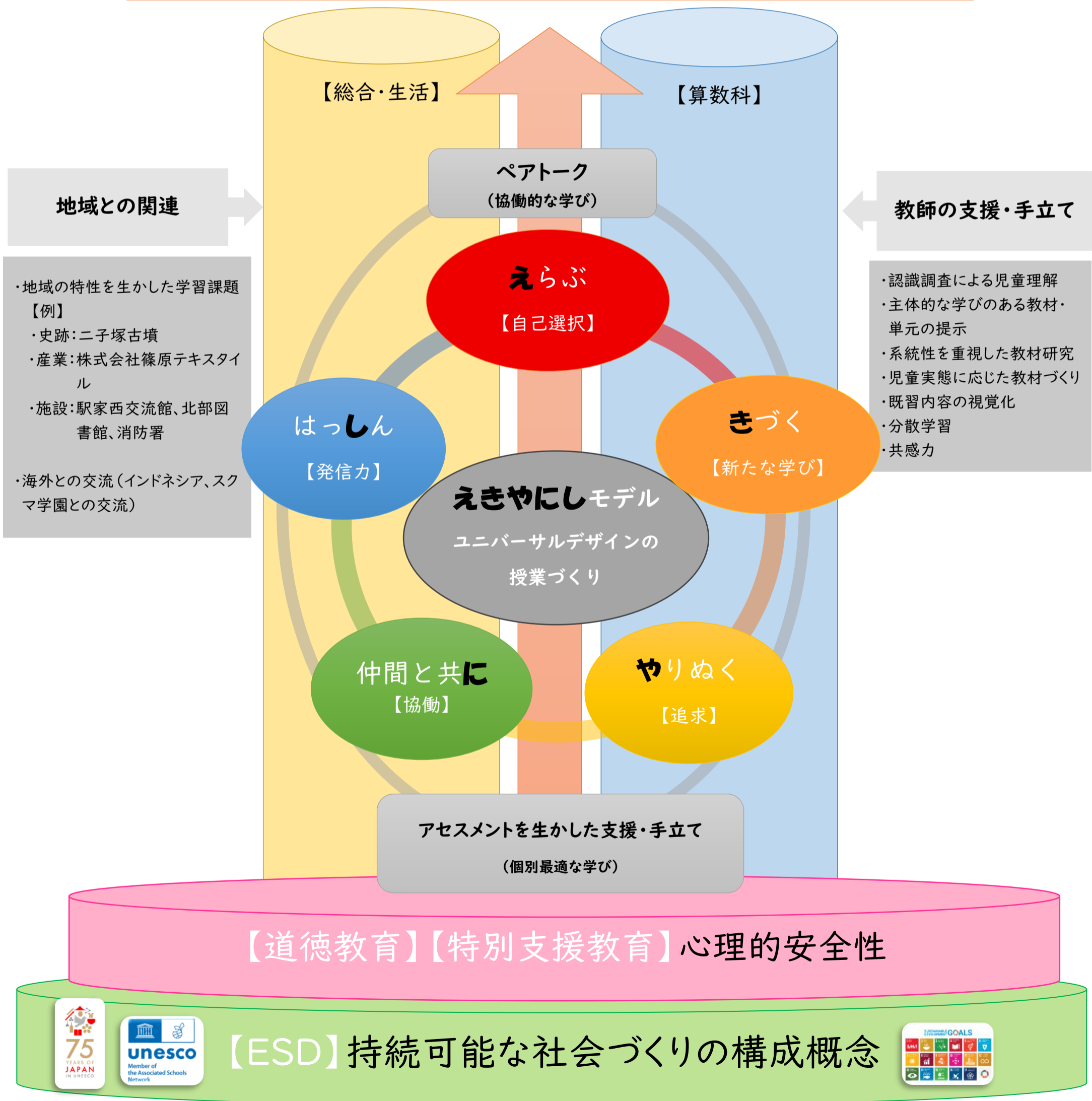
「みんなで分かる」喜びを味わう、主体的・対話的で深い学びの創造  
～ペアトークを通して、新たな学びや気付きのある深い学びの追求～

めざす授業

対話を通して、学びを深める授業～聴き合い・伝え合い～

児童の姿

- 【主体的】学習課題を自分事して捉え、解決への見通しをもって粘り強くやり抜く姿
- 【対話的】ペアトークを通して、「聴き合い・認め合い・助け合い」ができ、多様な考えに触れて、新たな学びや気付きをもてる姿
- 【深い学び】学んだことを生活経験や既習事項とつなぎ合わせながら活用し、協働的に学びを深めていく姿



# 駅家西小学校 研究の歩み

## 1 研究主題

「みんなで分かる」喜びを味わう、主体的・対話的な授業の創造

～ペアトークを通じた、新たな学びや気付きのある深い学びの追求～

## 2 主題設定の理由

本校の児童には、自己表現や既習事項を新たな学びへつなげることに課題が見られる。そこで、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、学習課題を「自分事」として捉え、全員が参加できる授業づくりを目指す。具体的には、ペアトーク等の協働的な学びを通じ、多面的・多角的な視点に触れることで、児童が「なるほど」「分かった」といった新たな気付きを得られるようにしたい。こうした気付きを積み重ね、思考を深めていくことで、「対話を通して学びを深める授業」を創造したいと考え、本主題を設定した。



### めざすこども像

【主体的】学習課題を自分事して捉え、解決への見通しをもって粘り強くやり抜く姿

【対話的】ペアトークを通して、「聴き合い・認め合い・助け合い」ができ、多様な考えに触れて、新たな学びや気付きをもてる姿

【深い学び】学んだことを生活経験や既習事項とつなぎ合わせながら活用し、協働的に学びを深めていく姿



### めざす授業

対話を通して、学びを深める授業～聴き合い・伝え合い～

## 3 研究の仮説

ESD・心理的安全性を基盤とした総合的な学習の時間・生活科や算数科の授業において、児童が新たな気付きを得られるペアトークを軸とした展開を構成すれば、「対話的を通して深める授業」が活性化され、学級全体で「聴き合い・伝え合い」ができる授業が実現するであろう。

## 4 検証方法

・学校評価アンケート(4月、9月、1月)

## 5 取組①【ESD】

### (1) ESDの目標

すべての人が質の高い教育の恩恵を享受し、また持続可能な開発のために求められる原則、価値観及び行動があらゆる教育や学びの場に取り込まれ、環境、経済、社会の面において、持続可能な将来が実現できるような行動の変革をもたらすことを目標とする。

※引用:「国連持続可能な開発のための教育の10年実施計画」

### (2) 各学年のテーマ

【低学年】すごいぞ!駅家西～つながりを見つけよう～

【中学年】みんなにやさしい駅家西の町をつくろう

【高学年】学びをつなぎ、世界に発信しよう!～駅家西の町から～

### (3) ESDの視点を加えることによって育まれる力(持続可能な社会の形成を担う人として期待される力)

- ① 身近な環境や社会を多様な観点で観る眼・姿勢を養う。
- ② 社会の成り立ちや関わり合う仕組み、その価値を捉える視点を養う。
- ③ より良い社会を創る視点を獲得し、身近なところで実践する力を養う。
- ④ より広い観点で地域の課題や特色を捉え、考察する、思考の基盤を培う。
- ⑤ 問題を他人事から自分事へとしていく、主体性と責任性を育む。
- ⑥ 自分自身だけでなく、異なる立場や地域の意見や考え方も尊重していく寛容な態度と多様性への理解を育む。

駅家西の様々な地域の主体と「つながり」ながら、福祉・環境・歴史・文化への取り組みに触れ、持続可能な社会づくりに向けて自分で考え、行動する力を育む。

(4) ESD の授業づくりの視点

①関連する持続可能な社会づくりの構成概念	② ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度	③ つながり
・多様性 ・相互性 ・有限性 ・公平性 ・連携性 ・責任性	・課題発見・解決力 ・コミュニケーション ・挑戦する力 ・社会参画力	・自分と学びのつながり(体験活動, 学習課題の自覚) ・内容のつながり(カリキュラムマップ) ・自分と他者とのつながり(グループ学び, 集団学び)

(5) 総合・単元構造図

以上のことを踏まえ、各学年で1・2年生は生活科、3～6年生は総合的な学習の時間を中心に、当事者意識を持った問題解決型の授業づくりを系統的に取り組んでいる。昨年度から、地域の企業である「株式会社篠原テキスタイル」とも連携し、地域から学び地域に発信、そして参画していく児童の育成に取り組んでいる。

※別紙参照:各学年の「総合・生活単元構造図」

6 取組②【算数科】

(1) 昨年度の課題と取組

平均正答率(%)				無答率(%)			
	本校	全国	差		本校	全国	差
国語	70	66.8	+3.2	国語	1.8	3.3	-1.5
算数	58	58.0	±0	算数	2.8	3.6	-0.8
理科	58	57.1	+0.9	理科	1.8	2.9	-1.1

平均正答率(%)				無答率(%)			
	本校	全国	差		本校	福山市	差
国語	64.5	66.2	-1.7	国語	4.8	9.3	-4.5
算数	64.0	67.9	-3.9	算数	4.7	8.0	-3.3

平均正答率(%)				無答率(%)			
	本校	全国	差		本校	福山市	差
国語	63.7	66.8	-3.1	国語	6.8	7.4	-0.6
算数	63.2	72.4	-9.2	算数	5.4	4.5	+0.9

右表は、昨年度の全国学力調査(小6)及び標準学力調査(小5・小4)の結果である。特に算数科において、全校平均と比較すると下回る状況にある。

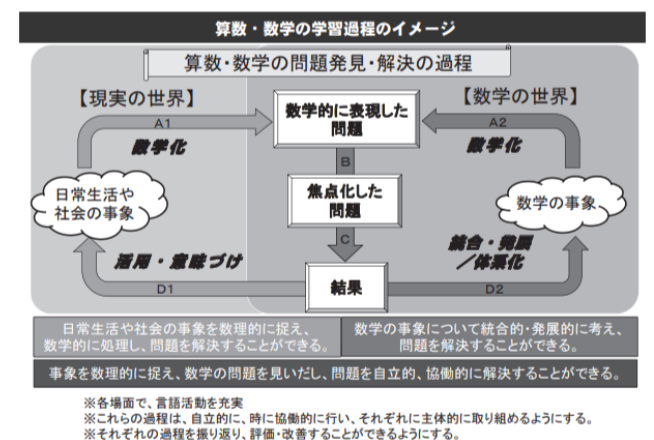
学力については、基本的な知識・技能とそれらを活用して課題を解決するために必要な思考力などの双方を育てていくことが大切であり、とりわけ、学年で身に着けることを着実に身に着けていくことが重要である。このために、昨年度より、本校では、①基礎学力向上②対話的な授業づくりの実現のための取組を継続的に行ってきた。①基礎学力向上については、認識調査を行うことで、児童がどこでつまづいているのか(何年生のどの単元で)を丁寧に分析し、40%未満の児童に対しては適切な支援・手立てのあり方を日々実践してきた。②対話的な授業づくりについては、自分の考えを見直したり、考えを再整理させたりするために「ペアトーク」を生かした授業形態を取り入れることで、一人一人に考えをもたせたり表現したりするなど、授業改善に取り組むことができた。

環境づくりとして、量感を養うための体験的な算数コーナーを各学年で展示したり、スキルタイムや家庭学習を生かして既習内容の定着を図ったりするなど、体験しながら習熟を図る取組も行っている。

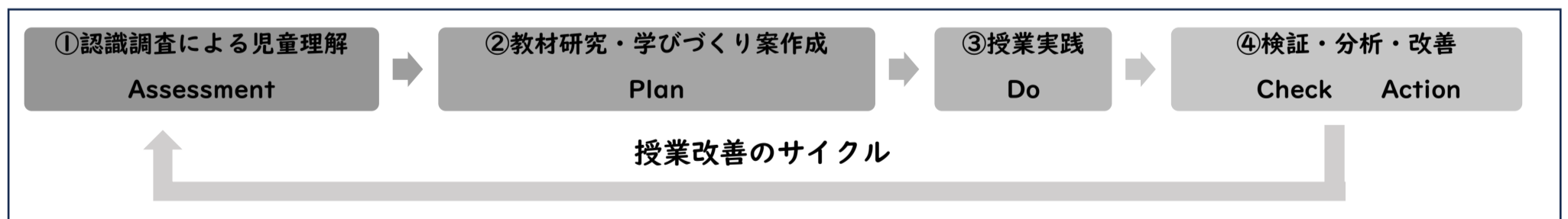
(2) 算数科の目標

数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

引用:学習指導要領(平成29年度告示)解説 算数編



(3) 算数科の授業づくりの視点



※具体的な1時間の授業構成については、別紙「算数科「新えきやにし」授業モデル」を参照。

(4) 今年度の取組について

- ① 「新えきやにし授業モデル」による授業づくり ※別紙参照:算数科「新えきやにし授業」モデル
- ② ペアトークの充実による、対話的な学びのある授業づくり ※別紙参照:ペアトークについて
- ③ 児童理解<アセスメント>を生かした授業づくり
- ④ 学習内容の習熟・定着を図る繰り返し学習 -問題データベースの活用と分散学習- ※別紙参照:分散学習について

7 取組③【特別支援教育】 ※別紙参照:「2026年度(令和8年度)特別支援教育推進計画」

(1) 児童の実態

【特別支援学級に在籍している児童】

慣れた集団の中では、快活である。自分の思いを伝えることが苦手で、集団参加や対人関係を図っていく上で特別な配慮を要する。抽象的な学習より、これまでの生活経験や学習方法を踏まえ、具体的で現実感のある学習を構成する必要がある。

【通常の学級に在籍している児童】

通常学級でも、LD・ADHD・ASD等により、学習や生活の面で特別な教育的支援を必要としている児童が多数存在している。校内においてできる合理的配慮を行い、彼らの毎日の生活・学習支援に努めていく。

(2) 特別支援教育の目標

豊かな心と健康な体を持ち、日常生活に必要な知識や技能、態度、および習慣を身につけ、みんなと励まし合って最後までがんばりぬく人間を育成する。

(3) 学校全体の特別支援教育の視点

① 本校での取組

本校では、「**心理的安全性**」「**個別最適な学び**」「**共感力**」を合言葉に取り組んでいる。通常学級・特別支援学級を問わず、以下の3つを意識して学級経営を行っている。

- ・「**心理的安全性**」……安心できる学校・学級作り
- ・「**個別最適な学び**」……多様な子ども達がそれぞれ学びを楽しみと思える授業作り
- ・「**共感力**」……児童の思いを受け止め、共感し、より良い形で返していく力

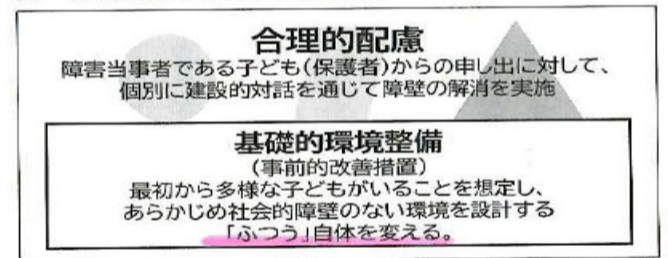
次期指導要領では、(中略)「**多様性の包摂**」が柱の一つとなっている。これはすなわち、「一般的な子ども」と「それ以外の子ども」があり、通常の教育に特別な教育や専門家・担当者を追加して対応する、ということではなく、そもそも学校におけるすべての活動を**多様性の包摂**を前提として再構築をする、ということである。

引用:教育開発研究所「教職研修」2026年1月号より「特別支援教育 野口晃菜」(p.46)

② 学校全体で特別教育に取り組む必要性

次期指導要領 第7章(4)「特別支援教育」においては、「通常の学級における合理的配慮の提供の充実等」について方向性が示されている。そのうえで、論点・留意点として、「『**社会モデル**』の考え方を踏まえて、**多様な子供がいることを前提とした教室環境や授業づくりを進めることが基礎的環境整備として重要である**」との記載がある。多様性を包摂するためには、既存の学校のあり方に子どもを合わせるのではなく、多様な子どもに合わせて学校のあり方を設計する必要がある……(省略)

図 合理的配慮と基礎的環境整備



引用:教育開発研究所「教職研修」2026年1月号より「特別支援教育 野口晃菜」(p.46)

本校では……

「最初から誰もが困らない工夫(板書の工夫や静かな環境、生活や学習のルールなど)」を学校全体の当たり前にすることが、心理的安全性につながる。これこそが、学級づくり・授業づくりの基礎となる。

そのために……

以下の3つに確実に取り組む。

- ① アセスメントを基に、児童理解を深めることで、児童の言動からその背景にあるものを想像し、根本的な原因を探る。
- ② 学年間・交流間で職員同士が密に連携を取り、児童に心理的安全性を保障する。
- ③ どの先生でも同じルールの元、学習指導や生活指導が行われる環境づくりを図る。

(5) 特別支援学級の取組

自立活動は6区分27項目から成り立っており、自立活動の時間は、区分や項目を意識して目標を立てたり活動内容を検討したりしている。目標は、全体の目標のもと、一人一人が自分のめあてを持ち、同じ活動でも付けていく力は異なる。そのために、アセスメントを丁寧に行い、その子の困り感の原因が何にあるかを考えて活動を設定している。

また、相手の気持ちを想像したり共感したりすることが苦手な児童が多いため、朝のスキルタイムのうち、**火曜日(朝会が無い日に限る)は読み聞かせの日**とし、特別支援学級の担任がクラスを回って絵本の読み聞かせを行っている。

区分	項目
1 健康の保持	(1) 生活リズムや生活習慣
	(2) 病気の状態の理解と生活管理
	(3) 身体各部の状態の理解と養護
	(4) 障害の特性の理解と生活環境の調整
	(5) 健康状態の維持・改善
2 心理的な安定	(1) 情緒の安定
	(2) 状況の理解と変化への対応
	(3) 障害による困難を改善・克服する意欲
3 人間関係の形成	(1) 他者とのかかわりの基礎
	(2) 他者の意図や感情の理解
	(3) 自己の理解と行動の調整
	(4) 集団への参加の基礎
4 環境の把握	(1) 保有する感覚の活用
	(2) 感覚や認知の特性についての理解と対応
	(3) 感覚の補助及び代行手段の活用
	(4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況の把握と状況に応じた行動
	(5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成
5 身体の動き	(1) 姿勢と運動・動作の基本的技能
	(2) 姿勢保持と運動、動作の補助手段の活用
	(3) 日常生活に必要な基本動作
	(4) 身体の移動能力
	(5) 作業に必要な動作と円滑な進行
6 コミュニケーション	(1) コミュニケーションの基礎的能力
	(2) 言語の受容と表出
	(3) 言語の形成と活用
	(4) コミュニケーション手段の選択と活用
	(5) 状況に応じたコミュニケーション

8 これまでの取組のまとめ

	2024年度(令和6年度)	2025年度(令和7年度)	2026年度(令和8年度)
ESD	インドネシアとの交流	コットンプロジェクト始動	「発信する力」の深化
算数科	表現する力の育成(振り返りを生かした授業づくり)	認識調査・ペアトーク	ペアトーク・分散学習
特別支援教育	合理的配慮・アセスメントに基づく支援の実践(パイロット校)	心理的安全性・アセスメント	心理的安全性・共感力